YAMAGA

近代の山鹿の偉人たちシリーズ 027

近代日本の工学教育・研究のパイオニア（一八五六～一九三〇）

中原淳蔵（なかはらじゅんぞう）

中原淳蔵は山鹿市中（なか）で生まれ、明治四年新設の熊本洋学校に一期生として入学、L・L・ジェーンズから学ぶ。その後工部大学校（現在の東京大学工学部）機械科に進学。第五高等学校教授、東京工業学校（現在の東京工業大学）教授を経て、明治三十九年熊本高等工業学校（現在の熊本大学工学部）初代校長、明治四十四年九州帝国大学工科大学（現在の九州大学工学部）初代学長に就任し、明治以後の日本の近代工業推進のための人材を育成した。その間、明治三十七年には日本機械学会第七代会長に就任、日本における機械工学分野の研究を先導した。

中原は英語に優れており、明治五年、明治天皇熊本行幸（ぎょうこう）にあたり御前（ごぜん）で英語読本暗唱を行った。また、工部大学校在校時に、現在、英学史学会等で本邦（ほんぽう）最初期の翻訳（ほんやく）として評価の高い「泰西名士鑑（たいせいめいしかん）」を出版した。明治三十四年工学博士、大正十二年日本機械学会名誉員、昭和三十八年熊本県近代文化功労者。

生い立ち

中原淳蔵は安政三年（一八五六年）、父左七郎、母千寿の長男として熊本県鹿本郡大道村中（現在の山鹿市中）に生まれました。父左七郎には、自分が教育を十分受けず不自由を経験したとの思いがあり、淳蔵の教育については熱心で七才より山鹿町医師入江玄叉のもとで寺子屋教育を受けさせました。寺子屋では、まず、いろはよりはじまり、方角、十干十二支、金銭受取、などを習字の手本で習いました。八歳からは四書五経を習いましたが素読が中心でした。そのころより武術として剣術柔術槍術なども習いましたがその方はあまり上達しなかったようです。十一才（慶応三年）のとき、総庄屋福田春蔵（号有龍）管轄の山鹿会所漢学塾に入りました。福田は明治元年（一八六八）に玉名郡肥猪村（現在の和水町）に帰り家塾を開きました。中原も入塾し明治二年（一八六九）十四歳ごろまで在塾しました。塾に特に規則はなく、当番が朝夕の炊事を担当し、午前中は清掃後自習、午後は野菜耕作、散歩・遊泳などの運動、先生の講釈は月二、三回で朱子学の儒道を中心とした講義がありました。食料は、月一度帰省して米粟一斗、梅干、胡麻塩等を持ち帰りました。実家のある中村から片道三里（十二㎞）の山道を食料を入れた豪傑袋を背負い、両刀を差して下駄で往復したといいます。当時は明治維新の最中で、尊王攘夷から開国進取へと時代は百八十度転換し、未曾有の変化の時期でした。山里の塾にもその波は押し寄せ、中原も先輩より維新の情勢を聞き田舎暮らしを歯がゆく感じていたと回顧しています。明治三年（一九七〇）に退塾して生家に帰り、そこで帳附け（会計）、むらゆき（農事監督）などを手伝っていました。因みに中原家は、代々鋳物業を営む大地主で苗字帯刀を許された在御家人（士族）でした。

熊本洋学校入学と英語での勉学

明治四年（一九七一）九月、中原は新しく開校された熊本洋学校に第一期生四十六名の一人として入学しました。入学は山鹿会所塾で教えを受け、洋学校では漢学教師兼寄宿者塾頭を務めた旧師の兼坂淳次郎（号止水）の勧めによるものでした。入学後中原は、同じく兼坂の知遇を得ていた小崎弘道とともに寄宿舎の生徒取締（塾頭補佐）に抜擢されています。ただし血気盛んで規則破りも多かった学生に対し、腕っ節の強かった小崎と異なり、武術の苦手な中原がその役目を無事達成できたかどうかは解りません。

さて、洋学校ではアメリカから招いた教師L・L・ジョーンズに通訳を付けて講義をする予定でした。しかし、ジェーンズはそれを断り、全てを英語でしかも一人で講義することとしました。これは、数学、地理などを通訳を介して講義することは内容を知らない通訳には所詮無理な仕事だったからです。しかし、そのためには、学生にまず英語を教えなければなりませんでした。その結果、ａｂｃを知らない日本人が、日本語を全く話さない外国人から英語を習うという真剣ながら滑稽な授業が始まりました。最初に黒板にａｂｃを書き、それを指さして教師がエーといえば、生徒一同がそれに呼応してエーという形で二日ばかりで二十六文字を覚えましたが、発音が難しく、例えばＬとＲは特に難しかったといいます。後日、中原は、「先生が口でエルと教え生徒がそ

熊本洋学校教師館ジェーンズ邸（熊本市水前寺公園）

熊本洋学校教師 L.L.
ジェーンズ（ジェーンズ邸蔵）

ちょっとコラム

熊本洋学校とジェーンズ;幕府寄りで明治維新に乗り遅れた熊本藩（明治四年以降は廃藩置県により熊本県）が、明治三年（一九七〇）横井小楠の教えを受けた実学党のメンバー（山田武甫、徳富一敬、竹崎茶堂ら）に藩政改革を託しました。彼らはその一環として、アメリカ留学から帰国した小楠の甥横井大平の進言を受け、西洋の学問を本格的に学ぶための四年制の熊本洋学校を設立しました。大平の紹介でアメリカのウエストポイント陸軍士官学校卒の陸軍大尉リロイ・L・ジェーンズを教師に招き、明治四年（一八七一）九月現在の熊本市古城町に開校しました。今でいえば高等学校レベルの学校です。

れを復唱したとき。思わずノットエル（エルの発音が間違っているということ）と先生がいえば、生徒は何もわからず異口同音にノットエルとまねるなど、先生の苦心も大変だったと思う。」と述べています。明治五年六月の明治天皇熊本行幸の折、洋学校にも臨幸されましたが、その時、中原は阿蘇の市原武正とともに御前で英語読本の暗唱を行っています。入学してわずか十カ月のことでした。

洋学校での教育は以下の通りでした。英語はスペリングブックより出発して上級読本、英作文と進み、文系科目では、万国地理、歴史、英文学、自然科学については、算術、代数、幾何、三角法、物理、化学、生理、などをアメリカから取り寄せた教科書を使って学習しました。ジェーンズの授業の基本方針は「我教えず自ら学べ」で大変厳しく、学生たちも必死で勉強しましたが、四十六名の入学者のうち四年に進級できたのは中原を含めわずか十五名でした。しかし、進級した学生たちの英語の上達と学力の向上は目覚ましいものでした。中原は「三年間で、先生の話もわかり、簡単な会話作文もでき、英語の小説を読んでほぼ理解できるようになったのは、全てジェーンズ先生の教育のお蔭である。」と語っています。

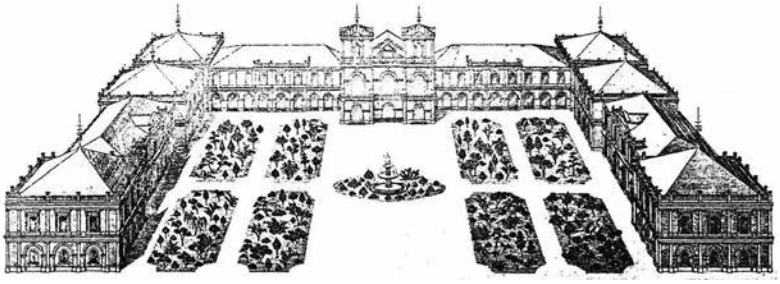
なお、熊本洋学校は、明治九年廃校となりました。直接の理由は、ジェーンズが自宅で教えた聖書を勉強した、海老名弾正、横井時雄、徳富蘇峰ら三十五名の学生が、花岡山頂で奉教趣意書に署名しキリスト教に入信したためです。このグループはその後新島襄が設立した京都の同志社英学校（現在の同志社大学）に入学し、そこで「熊本バンド」と呼ばれました。同志社卒業後、教育、学術、政治経済、言論、宗教などの各界で活躍し、熊本洋学校の名前を歴史に残す役割を果たしました。このことは平成二十五年のＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」でも取り上げられ、よく知られるようになりましたが、次に述べるように中原はその事件が起きる前にすでに上京していました。

工部大学校への進学

洋学校は四年制だったので、明治七年（一八七四）九月四年次に進級した学生は卒業後の進路を考える時期になっていました。ちょうどその時、洋学校同期入学ですぐ退学して上京し工部大学校（現在の東京大学工学部）に入学した竹下康之が病気療養のため帰熊し、お城近くの病院に入院していました。中原は、病気見舞いに行った折、工部大学校の話を聞きその素晴らしさに心が動きました。恩師ジェーンズがいつもこれからは技術者が日本に必要といっていたこともあり、そこへの進学を決意、すぐ洋学校に退学届を出し、秋学期（工部大学校は四月からが新学期）に復学する竹下とともに上京しました。当時、東京まではまず熊本の百貫港から長崎まで船で行き、そこから外輪汽船で瀬戸内海を経由しての約一週間の大旅行でした。翌明治八年（一八七五）三月中原は、工部大学校機械科に合格しました。入試の際、得意科目の物理の英語での口頭試験が素晴らしかったので、試験官から誰に習ったかと聞かれ、熊本洋学校のＬ・Ｌ・ジェーンズ氏に習ったと胸を張って答えたこと、数学の試験は全問正解したつもりだったが、裏面にも問題が印刷してあったのをうっかりして見過ごしていたことに終了後気付き、不合格を覚悟したことなどがエピソードとして残っています。しかし中原は全体の一番で合格していました。中原の優秀さと熊本洋学校の教育レベルの高さを示すものでした。

工部大学校は明治三年（一八七〇）明治政府が技術者養成のために設置した六年制の大学で、教授陣として英国グラスゴー大学から教頭となったＨ・ダイアー以下八名を招き学校の創設全般を委託しました。校長には函館五稜郭の幕府方勇将大鳥圭介が任命されました。全寮制で学

泰西名士鑑表紙（国立国会図書館デジタルライブラリより）
西洋の著名人士を紹介した翻訳書。中原が工部大学校在学中に翻訳した。乾立夫も工部大学校学生で熊本以来の友人であるが主に発行を担当したと伝えられている。我が国では中村敬宇の「西国立志編」に次ぐ最初期の翻訳である。



工部大学校本館

生は全額公費支給生となり、その教育研究設備は当時世界最新のものであったといわれています。中原はそこで充実した学生生活を送り、明治十五年（一八八二）一等卒業生で工学士の学位を得て卒業しました。当時は一等卒業生のみに工学士が授与されました。

なお、中原は在学中、明治十三年（一八八〇）に、西欧の著名な科学者、政治家、文人らの生涯や業績を、原著をもとに他書も参考にして解説した「泰西名士鑑」を熊本洋学校二期入学でその後工部大学校化学科に転じた乾立夫と共同で翻訳出版しています。この出版は、日本英学史研究の分野で現在大きく評価されています。中原は七年かかって工部大学校を卒業していますが、彼のような秀才が試験成績で一年留年したとは考えにくいところがあります。筆者の推測の域を出ませんが、この「泰西名士鑑」の翻訳に一年間費やしたとも考えられます。

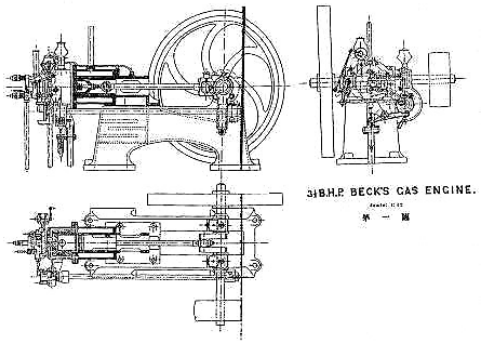
実業・第五高等学校時代

工部大学校卒業時に、中原は郷里の有力者から菊池川からの揚水・灌漑事業への参加を勧誘されます。そのため卒業後官吏への就職を断って帰郷し事業の経営に参加・出資しますが、わずか一年で失敗し多額の損失を被りました。その後は、家業の鋳物会社を経営する傍ら、家塾を開いて近在の人に漢学英語数学などを教えました。しかし、同期生たちの中央での活躍を聞くにつけ、心中穏やかでないものがあったと思われます。このことを後年中原は「経験を積むために就職して一苦労することをしなかったことを後悔しても後の祭りだった。若くして功を急ぐのは失敗のもとである」と語っています。しかし明治二十年（一八八七）熊本に第五高等学校（現在の熊本大学の前身の一つ）が開校されることなり、そのことが中原に大きな転機をもたらしました。たまたま、校舎建築のため来熊した工部大学校建築科出身の先輩久留正道に依頼し、その斡旋で、同校の数学と物理の教授に任用されたからです。これを機会に中原はその後教育研究の道へ進むことになります。五高在任は約三年と短い期間でした。

東京工業学校時代

明治二十三年（一八九〇）、中原は東京工業学校（その後東京高等工業学校となる。現在の東京工業大学の前身）機械工芸学科の教授に招聘されました。ここで、中原は機械工学の研究者・教育者として最も充実した時期を過ごすとともに、その研究成果で機械工業の分野で一躍脚光を浴びることになります。『日本自動車百年史』に次の記述があります。

「ガスエンジンを国産した最初期のものと思われるのは、東京工業学校（現在の東京工業大学）が、明治二十五年（一八九二）に製作したベック（英）式ガスエンジンである。これは工部大学校（現在の東京大学工学部）出身の工学士中原淳蔵が先導となり、東京工業学校機械工芸科で試作したもので、同年始めに製作に着手、年末には完成し試運転が行なわれていた」。上記の記事は中原が工学の教育者・研究者として本格的な道を歩みだし、同時に黎明期にあった日本の機械工業界で一躍注目を集めたことを意味します。研究面のみならず、教育面では、技術系学生のために日本で初めて力学の教科書「実用力学」を出版しました。さらに機械工芸学科長として学校の整備充実に努めました。この時期の活動には具体的に以下のよ



中原が制作したベック式ガスエンジン設計図
（『日本自動車百年史』より）

（上）機械学会誌に発表されたガスエンジンの論文（日本機械学会蔵）
（下）中原が著した力学教科書（国立国会図書館デジタルライブラリ）

うなものがあります。

・**海外留学**：明治二十八年（一八九五）から三十一年まで三年間、英国・ドイツへ機械工学研究のために留学を命じられました。当時、中原は英語に堪能で、かつ、欧米文化にも精通した数少ない日本人の一人でした。それゆえ留学生活は大変充実したものだったことは、英国滞在中に生まれた長男の名前を英と命名したことからも窺えます。

・**機械学会（現在の日本機械学会）**：機械工学発展のため、明治三十年（一八九六）に作られた学会で、中原は創設メンバーとして参加。明治三十七年（一九〇四）には、第七代幹事長（現在の会長）となりました。なお、大正十一年（一九二二）に中原は工部大学校の先輩で同期の真野文二（創設者で初代会長）、井口在屋（東京帝大教授）、アメリカ人のE・スペリーとともに第二回日本機械学会名誉員に推挙されています。因みに初回明治三十二年（一八九九）の名誉員は、工部大学校教頭だったH・ダイアーと長らく東京帝大機械工学科で教鞭を取ったC・D・ウエストの二名で第二回の推挙はそれから二十三年経過しています。中原らの日本における機械工学発展への貢献の大きさを示しています。

・**工学博士の学位受領**：中原は明治三十八年（一九〇五）工学博士の学位を得ています。学位令は明治二十年（一八八七）施行され現在と異なり授与権者は文部大臣でした。当時は「末は博士か大臣か」といわれた時代であり、学者にとって博士の学位は最高の名誉でした。

・**他大学での教鞭**：高等工業学校以外でも、中原は嘱託教授として教鞭をとりました。一つは東京工手学校（工部大学校の流れをくむ学校。現在の工学院大学）です。また、海外から帰国後に海軍大学でも講義を行いました。

このように、東京高等工業学校時代が中原にとって最もアクティブな教育研究時期であったと思われます。

熊本高等工業学校時代

・**学校の創設**：明治三十六年（一九〇三）、実業学校令が施行され、それに基づき大学の工学部とは異なる高等実践技術教育を行うための高等工業専門学校が、東京、大阪、京都、名古屋に設置されました。中原は名古屋高等工業学校創立委員となります。明治三十九年（一九〇六）には熊本高等工業学校（現在の熊本大学工学部の前身）が設立されることになり、中原はその初代校長となりました。全くの新設校ではなく明治三十年（一八九七）第五高等学校に設置された医学部、工学部が、医学部は長崎医専として、工学部は熊本高等工業学校として独立したものです。余談ですが、当時熊本県の官吏にはランクがあり、五高校長、高等工業校長、第六師団長、県知事（官選）の順だったと聞いたことがあります。その通りとすれば、まさに中原は故郷に錦を飾ったことになります。中原の在任期間は、明治三十九年（一九〇六）四月から明治四十四年（一九一一）四月までの五年間です。その間新校舎建築は言うに及ばず、学生の服装、校歌の設定に至るまで実にさまざまのことを行わねばなりませんでした。着任三年後の明治四十二年（一九〇九）にやっと校舎竣工式を迎えることができました。残念なことに、その時の校舎のほとんどは大正十一年（一九二二）火事で焼失し、多くの資料も失われました。

なお、熊本洋学校で同期の余田司馬人は、卒業後五高に勤務していましたが、高等工業創設に伴い同校に移籍し事務方のトップとして中原を支えました。

・**機械実習工場と工作機械**：上述の火災で唯一残ったのが、当時の機械実習工場です。（五高校舎建築を担当した久留正道の設計。現在は熊本大学工学部資料館（国指定重要文化財）になっている。）中原は、東京高等工業学校時代から機械の製作に必要な工作機械の重要性を訴え政府に提案まで行っていましたが、

熊本高等工業学校武道館落成式での中原（前列中央）

熊本大学工学部研究資料館（旧機械工場）

図4-1　15尺旋盤［明治39年（1906年）購入］
製造会社（セリッダソン・ネルタール社）米国
仕　様（床　　長：4,572mm）
（振　　り：　700mm）
国内の工作機械メーカーがようやく発足を見た時代に、既に本学では大容量の本旋盤が設置されていたことは驚くべきことである。昭和47年頃まで長大物加工並びに正面旋盤の代用として活用された。

図4-2　10尺旋盤［明治39年（1906年）購入］
製造会社（テンプスタームアー社）米国
仕　様（床　　長：3,048mm）
（振　　り：　450mm）
15尺旋盤につぐ長尺物の加工として、昭和45年頃まで活用されたものである。

明治39年高工機械工場に購入された工作機械

その見識を生かし、当時最新鋭の高価な米国製工作機械を実習工場に導入しています。なお、それらの機械は、現在でも使用可能な状態で保存されており一般にも公開されています。

九州帝国大学時代

明治四十四年（一九一一）、中原は九州帝国大学工科大学教授兼任となり、同年四月同大学発足に伴って専任となりました。実は、明治四十一年（一九〇八）、彼はすでに九州帝国大学工科大学創立委員となっており、このことは予測されていたことです。彼は初代の工科大学学長（現在の工学部長）として新しい工学部組織創設に努力することになります。当時の初代総長は前東京帝国大学総長の山川健次郎でした。大正二年（一九一三）五月第二代総長として真野文二が着任しました。文部省実業学務局長兼東京帝国大学教授として中央で政府の高等技術教育立案推進の中心的存在であった実力者であり、大正十五年（一九二六）三月まで実に十二年八か月の間総長に在任し、今日の九州大学の基礎を築きました。中原は技術教育・研究者としての最後を奇くも若き日の工部大学校機械科の一期先輩と過ごすことになります。その間工科大学（工学部）の整備に尽力すると同時に、教育研究面でも業績を上げました。大正九年（一九二〇）、福岡で同郷の大先輩清浦圭吾元総理大臣を総裁、真野文二を副総裁として工業博覧会が開かれていますが、その博覧会の機械部審査長として中原の名前があります。大正一二年（一九二三）中原は大学を退官し、九州帝国大学名誉教授となりました。

九州大学時代の中原。風貌が当時のライオン宰相浜口雄幸に似ていたことから九大のライオンというニックネームがついた。ただし、人柄は寛容，謙譲そのものであったという。（九州大学ギャラリ蔵）

中原の目指したもの

・産業に役立つ実学としての教育研究：彼は、明治維新後の工業教育・研究機関創設に際し、白紙の状態から日本における新しい教育研究システムを構築する仕事に携わることができた数少ないメンバーの一人でした。具体的には熊本高等工業学校、九州帝国大学工科大学の創設責任者、東京職工学校から東京高等工業学校への変遷時における機械科長、また、日本機械学会創立時メンバーとしてです。その間、彼が目指したのは実学としての工学技術、すなわち、産業界に直接役立つ教育研究であり、それを実現する教育研究機関でした。研究に関しては、東京高等工業学校でのベック式ガスエンジンの開発、九州大学における水力発電用ペルトン水車に必要な安価かつ高性能のバケット開発がよく知られていますが、機械学会誌に発表されたいずれの研究論文においても企業での使用を切望する旨の一文が付記されています。また、当時、欧米から輸入するしかなかった高性能な工作機械の開発・生産を産学連携とインターンシップにより国内で行う計画を政府に提案しています。当時はこの斬新な計画に対し予算はつきませんでしたが、このような考え方は現在では日本における「ものづくり」と産官学連携にとって必要不可欠なものとなっており、中原の先見性の素晴らしさを示しています。さらに東京高等工業学校時代には、技術系学生に対し理解の便を図った力学の教科書「実用力学」を日本で最初に出版しています。このような教育研究に対する中原の姿勢は、熊本洋学校におけるジェーンズの教育、工部大学校における実践技術を重視したH・ダイヤーらの工学教育、さらには英独への留学によって培われたものと考えられます。しかし、十年以上にわたって英語を駆使した西欧式教育を受けた中原のような工学者は当時（現在でも）ほとんど皆無であり、彼の考えは十分理解されることなく、逆に工学の分野では学術偏重、技術軽視がその後長きにわたって続くことになります。

・教育理念：中原の教育理念は、一言でいえば学生を「紳士として遇する」ところにありました。その由来は、自身が受けた教育からきていると考えられます。熊本洋学校における恩師ジェーンズは、アメリカのウエストポイント陸軍士官学校出の軍人であり武士的な風格を備えていましたが、教育においては、イギリスのパブリックスクールにおける全寮制で教師が学生と寝食を共にしながら「自由と規律」を体得させる全人格教育を基本方針としていました。「我教えず自ら学べ」がジェーンズの残した言葉です。それに加え、工部大学校でイギリス人教授から受けた教育、イギリス・ドイツにおける留学を通じてごく自然に自身の教育観が形成されたものと考えられます。熊本高等工業の一期生吉岡成による第一回入学式の思い出

を綴った文に中原の教育観がよく表れている部分があります。以下原文の一部を示します。

「まず、中原初代校長の訓話がありました。その訓話の全部が私ども新入学生の熱き血潮を沸かしむるに充分でした。中でも感激を覚えましたのは「学校では諸君をこれから立派な青年紳士として待遇する。それゆえ、当校においては修身または倫理の学科は課せないのである」という意味の一言でありました。「酒は飲んではならぬと禁止はせない。だから学校の名誉と自己の品格を汚さぬよう常に修養を怠らず節制を守り中庸を保たれたい」といった具合に諄々と説かれました。すでに中学五年間の基礎教育を終えて一通り常識を備えた学生に対して、人の範を示してこれを見習えと諭すよりも却って各自に反省自重せしむるの趣旨に出られしほうがどれほど効果的でありましたでしょう。この訓話を聞きました私どもの全身にはあたかも神様から偉大な力を授かったように一種の霊感に打たれ、生まれ変わったように生気溌剌たる精神の躍動を禁ずることを得ませんでした。（中略）その後各先生方からもお話を伺い深き感銘を受けましたのは、中学校の先生に比し、格段の親しみ、すなわち単なる先生と生徒という月並みの間柄ではなく真の師と弟子、例えば昔幾多の教訓的佳話を後世に残せる寺子屋、私塾等に於いて見受けることのできる麗しき師弟の真情がこんなではなかったかと思われる特種の親しみを感じたことでした。」

上記の文から読み取れるように、学生を青年紳士として遇するという基本的な考え方は、中原にとっては、それまでに自身が受けた教育と留学経験から来た、ごく自然な確信というべきものだったようにも思われます。また師弟の真情を大切にする伝統は、高工から新制熊本大学の工学部へと長らく受け継がれてきました。

・西欧文化の紹介：工部大学校在学中に中原は熊本洋学校第二期入学でその後工部大学校化学科に転じた乾立夫とともに「泰西名士鑑」を翻訳出版したことはほとんど知られていません。これは、欧米の著名な政治家、文人、科学者らの生涯や業績を解説したもので、当時のいくつかの関係書を翻訳・整理してまとめたものと考えられています。シェークスピアを「沙比土阿」と表すなど苦心のほどが偲ばれますが、当時東京大学にも英文科はまだ存在せず、英文学関連の翻訳もほとんどありませんでした。日本英学史学会初代会長であった豊田実博士は、本書を本邦英文学文献の草創のものとして高く位置付けていますが、その翻訳者中原淳蔵が熊本出身で専門外の機械工学科の学生であったことは知らなかったといいます。この業績は今後もっと評価されるべきと考えます。

その他

・徳富蘆花との関わり：徳富蘆花とは、熊本洋学校関係者としても縁がありましたが、中原の妹うちが菊池の原田家に嫁し、うちの義妹にあたる原田愛子が蘆花と結婚したため親戚となりました。蘆花と愛子の結婚式に淳蔵も出席しています。蘆花の紀行作品「死の蔭に」には、淳蔵をモデルとした人物が登場しているといいます。

・家族：中原は明治二十二年（一八八九）頃、江上ひこと結婚、一女をもうけましたが二四歳で早世したため、明治二十七年（一八九四）頃、平山うめと再婚、三男六女をもうけました。ひこは水俣の江上家（料理研究家江上とみ（旧姓藤崎）の嫁ぎ先）の出、うめは福岡の平山家の出で幕末の勤王の志士平野國臣の姪に当たります。また、前述の長男英は大道村長などを務めました。英の長男淳（淳蔵の孫）は山鹿市長を五期務めました。

・晩年：九州大学退官後は、福岡市郊外の奈多浦（現在の東区奈多）に居を構え、自宅を江月松風荘と称しそこで悠々自適の生活を送りました。昭和五年（一九三〇）六月に、『六十年前の思い出』と題した若き日の追憶を自身のガリ版刷で作り親族に配布しています。中原の青年期までの思い出が詳しく記載されており、これまで中原に関し発表された文献はほとんどこの内容の範囲で記述されています。表紙は当時流行したアールヌーボー風のデザインで、中原の衰えぬ好奇心を示しています。中原は同年十二月五日七十五歳で死去。墓は生家のある山鹿市中にあります。昭和三十八年（一九六三）熊本県近代文化功労者。故郷の大道小学校には、大道村制百周年を記念して平成元年山鹿市大道校区民一同によって建立された顕彰碑があります。

山鹿市立大道小学校にある中原淳蔵の顕彰碑

年表 History

安政三年（一八五六）	▼十二月七日鹿本郡大道村大字中で父中原左七郎、母千寿の長男として生まれる
文久三年（一八六三）	▼七才のとき山鹿町の寺子屋（医師入江玄叉）で教育をうける
慶応三年（一八六七）	▼十一才の時、山鹿町会所塾（総庄屋福田春蔵所管）で漢学を学ぶ（大政奉還・王政復古）
明治元年（一八六八）	▼玉名郡肥猪村に開かれた福田春蔵の肥猪家塾に入塾
明治三年（一八七〇）	▼肥猪家塾を退塾。家事手伝い
明治四年（一八七一）	▼九月熊本洋学校に一期生として入学。入学生四十六名
明治五年（一八七二）	▼六月明治天皇熊本行幸時に御前にて阿蘇の市原大次郎（武正）とともに英語の暗誦
明治六年（一八七三）	▼（工学寮に第一期生入学）
明治七年（一八七四）	▼九月四学年に次席で進級。首席は山崎為徳。進級者十五名。秋、退学届を出し、工学寮入学を目指し上京する
明治八年（一八七五）	▼三月工学寮（後の工部大学校）合格
明治十四年（一八八一）	▼暑中休暇帰省時に、前山鹿郡長高浜敏則に請われ、灌漑事業に手を出す
明治十五年（一八八二）	▼五月工部大学校機械科四期生として卒業・同期は井口在屋他四名。一等卒業生の成績で卒業。工学士の学位を受領。官途には就かず、帰郷して灌漑事業に参加、出資したが失敗に終わる。
明治十六年（一八八三）	▼鋳物会社を山鹿町毛利嘉太郎らと共同で起こす
明治十九年（一八八六）	▼鋳物会社を個人営業とするも経営不振に陥る。自宅に家塾を開き、英語、数学、漢籍を講義する
明治二一年（一八八八）	▼三月工部大学校先輩で文部省建築技師であった久留正道に依頼し第五高等中学校教諭（数・物担当）の職を得る
明治二三年（一八九〇）	▼八月第五高等中学校辞職。上京して東京工業学校教授となる。（明治三十四年東京高等工業学校と改称。現在の東京工業大学）
明治二七年（一八九四）	▼平山うめと結婚
明治二八年（一八九五）	▼文部省留学生として英・独に留学
明治二九年（一八九六）	▼英国滞在中に日本にて長男出生。電報にて英（ひいで）と命名
明治三十年（一八九七）	▼留学より帰国。機械学会正員となる
明治三二年（一八九九）	▼海軍大学校教授嘱託
明治三四年（一九〇一）	▼工学博士（文部省）
明治三五年（一九〇二）	▼名古屋高等工業学校創立委員
明治三六年（一九〇三）	▼十月機械学会第七代幹事長（会長）
明治三九年（一九〇六）	▼四月熊本高等工業学校校長（初代）兼第五高等学校教授
明治四一年（一九〇八）	▼五月九州帝国大学工科大学創立委員
明治四二年（一九〇九）	▼四月新校舎落成記念式
明治四三年（一九一〇）	▼山鹿製糸会社創設に賛助し参与となる
明治四四年（一九一一）	▼一月九州帝国大学工科大学教授兼任 四月九州帝国大学工科大学教授専任として転出、同工科大学初代学長
大正九年（一九二〇）	▼福岡での工業博覧会で機械部審査長を務める。（総裁清浦圭吾、副総裁真野文二、電気部審査長荒川文六）
大正十一年（一九二二）	▼日本機械学会名誉員（真野文二、井口在屋とともに推薦される）
大正十二年（一九二三）	▼九州帝国大学名誉教授
昭和五年（一九三〇）	▼十二月五日七十五歳で死去

近代の山鹿の偉人たち　027
近代日本の工学教育・研究のパイオニア　中原淳蔵

平成 26 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会　教育部　文化課
〒861-0501　熊本県山鹿市山鹿 156-3
TEL　0968 - 43 - 1691

執筆・編集
岩井　善太　　宮崎　歩（山鹿市教育委員会）

参考文献
岩井善太（2010）、熊本が生んだ明治の実践工学者中原淳蔵、工学教育（日本工学教育協会機関誌）、58巻、2号、21-26頁
岩井善太（2011）、中原淳蔵と熊本洋学校、熊本県立技術短期大学校紀要、12号、3-11頁
岩井善太（2012）、中原淳蔵と工部大学校、熊本県立技術短期大学校紀要、13号、3-10頁
日本自動車百年史一前史一、八重洲出版、（1996）
熊本大学工学部百年史、熊本大学工学部創立百周年記念事業後援会（1997）
熊本大学工学部研究資料館内国指定重要文化財工作機械の動態保存化、熊本大学工学部（2002）
田中啓介編（1985）、熊本英学史、本邦書籍
山鹿市史、山鹿市編（1985）
中原淳蔵（1930）、六十年前の思い出（私家本）
「実用力学」「泰西名士鑑」は国立国会図書館ホームページより転載（国図電1401064-1-811号）

ご協力いただいた方（敬称略）
山村文子、中原玲子、富浦梓、堤一郎